

臨地実習におけるコミュニケーションの学び

— 学生のインタビューからの検討 —

酒井 志保

A Study of Nursing Student's Communication in Bedside Training — Through Interview with the Student about Communication —

Shiho SAKAI

要旨：コミュニケーション教育は看護実践にいかせてこそ意義がある。基礎看護学ではコミュニケーションを統合させて、学ばせるよう配慮している。今回、コミュニケーションの学びの内容を明らかにするため、一学生にⅡ期実習および各論実習でのコミュニケーションについて半構成的インタビューを行った。インタビューした内容を検討し、学びの内容を整理した。結果、以下のことが得られた。

- 1) 実習中、患者との関わりで課題を見出すことができ、コミュニケーション教育の目標に近づいていた。
- 2) コミュニケーション技法を使うことは自分、患者にとって意義があると気づいていた。
- 3) 自分と患者の関わり以外でも、コミュニケーションの意義を学ぶことができていた。また、学んだことを、看護に反映させようと努力していた。

このことから、漫然と指導だけするのではなく、いかにコミュニケーションが学べたかを把握することは学生の成長につながり、その重要性が示唆された。

キーワード：コミュニケーション、基礎看護学、臨地実習

Summary : The finding presented here are the part of the analysis of the communication learning of a nursing student. I interviewed her and the conclusions are as follows:

1. The student could reach the aim of communication lesson we proposed and found out the problems in communicating with the clients.
2. The student noted the significance of communication using reflection-method for the clients.
3. The student could learn the value of communication from other people, friends and instructors. She tried to reflect what she learned for better nursing.

The evaluated contents suggest the importance of communication teaching in fundamentals nursing for nursing students.

key words : communication, fundamentals of nursing, bedside - training

看護学科 講師

本研究の一部の修正したものを第12回看護学教育学会学術集会において発表した。

はじめに

看護におけるコミュニケーションを講義や臨地実習で統合して学習することは、対象を理解し、看護を实践するうえで大切である。見藤は、看護を行う基本的な態度を実習を通して学ぶ必要があると示唆し、「人間理解に必要な教育的技術、生活指導技術、相談・面接の技術（カウンセリング）も組み込まれ、理論やその考え方、態度、技術が学習されることはきわめて大切である」と述べている¹⁾。しかし、このような活きたコミュニケーション教育を進めることはたやすくはない。そのため、学習を深められるような十分な教育的配慮や指導の工夫、どのように学べたかの確認が必要である。

学内でのコミュニケーションの学びを臨地実習でいかせているかについて、前回調査した。コミュニケーション能力の育成を重視した教育により、学生の大半は臨地実習で学びをいかし、患者とのコミュニケーションがよくとれるようになった²⁾と評価していた。しかし、これは学生の自己評価であるため、客観性に欠けることも考えられる。また、教員・指導者が四六時中、学生と患者がコミュニケーションしている場面に関わることは困難である。さらに、コミュニケーションによって学生のなかに起こっている変化を十分に読みとることはできない。学生がどのように学んでいるかの確認が本来、必要であると思われた。

今回、教員と指導者が、基礎看護学Ⅱ期実習（以下、Ⅱ期実習）、成人・老人看護学実習（以下、各論実習）の2回の臨地実習指導にわたって、コミュニケーションをよく学べたと感じた学生がいた。この学生の学びの内容を明らかにすることが、コミュニケーション教育の一助になると考える。

I. 研究目的

1. 臨地実習における学生のコミュニケーションの実践とその学びを知る。
2. 2度の臨地実習を通して学びの内容に変化があるかを知る。

II. 研究方法

1. 対象：看護学科2年生の一学生（以下、Aさん）。患者に関わる態度、前回の調査³⁾、日々のカンファレンスを通し、教員・指導者がよくコミュニケーションを学べている、と感じた者。

2. 実践の場としての臨地実習

(1) 実習場所：Ⅱ期実習、各論実習とも外科系の同一病棟。教員・指導者も同じ者。

(2) 実習期間と実習状況の概要：

①Ⅱ期実習（2001.9.）

大腸癌の患者（45y, M：以下、B氏）を受け持った。実習初日、術前のCF検査のため、病室でB氏に会えなかった。午後、病棟看護婦のはからいで、CF検査を一緒に見学しようと思ったが、放射線科の看護婦を介して「今日の見学は、しないでほしい」と見学を断られた。その日の実習後、学内に戻りロールプレイ演習を行った。自らが患者役になることで患者の気持ちが変わったようだ、と述べていた。その後の実習では、患者との関係もよく、患者の行動や気持ちをよく理解していると感じられた。

②各論実習（2002.2.～2002.3.）

結腸腫瘍の患者（55y, M：以下、C氏）を受け持った。Aさんと出身地が同じで、共通の知り合いがいた。C氏は、朴訥で穏やかな雰囲気の人であった。術前、術中、術後を通し関わり、実習中、関係も良好であると感じられた。C氏は順調に回復し、退院指導まで実施した。

日々のカンファレンスでは、他の学生とその受け持ち患者の事例を実習期間中、取り上げたことがあった。同じ実習グループの学生Sさんは、自分自身のコミュニケーションの取り方、受け持ち患者との関係で、悩んでいた。Sさんは手術見学の時、その患者に「おまえは立っただけか？」と言われたことにも落ち込んだ。しかし、その後Sさんが術後の日常生活援助を続けると、さりげなくその患者がSさんに「ありがとう」と言ってくれた。Sさんは、この言葉を聞き逃していたため、教員がそれをカンファレンスで伝え、実習グループでコミュニケーションについて話し合った。

3. 研究方法：

AさんにⅡ期実習および各論実習でのコミュニケーションについて、半構成的インタビューを行った。

Ⅱ期実習についてのインタビューは、Ⅱ期実習終了5ヶ月後（各論実習の直前）に行った。各論実習についてのインタビューは、各論実習終了11日後に行った。

校内の個室で、実習での患者とのコミュニケー

ションを振り返ってもらった。面接時間は各60分程度であった。分析は、テープ起こしした内容をくり返し検討し、学びの内容を整理した。学びはコミュニケーションで感じたこと、思ったこと、考えたこと、知ったことからカテゴライズした。

なお、Ⅱ期実習後には、実習初日、話を『聴く』練習（ロールプレイ）、初日と最終日にコミュニケーションについてアンケートを行っている。

4. 倫理的配慮：Aさんに事前に研究の主旨を説明をし、録音の承諾も得た。

Ⅲ. 結果

1. Ⅱ期実習のコミュニケーション（表1）

(1) Ⅱ期実習の記載内容から

実習初日と最終日のコミュニケーションの自己評価は、患者の当日の検査スケジュールからコミュニケーションをとる時間がなく、検査の見学も看護婦を通じて断られ、「納得した部分と疑問な部分があった」ことが記載されていた。

最終日の自由記載では、「質問の方法が難しい」、「看護婦や教員と自分を比較する」、「目的もなくただだと話してしまった」と、できなかった内容や反省があった。リフレクションは、使用することで【会話が深まった】としていて、使った回数は少なかったものの【患者の思い・

《奥》を聴くことができた】時があり、「もっと実践したい」と述べていた。

(2) Ⅱ期実習のインタビューから

実習初日、前回のⅠ期実習では受け持ち患者の受け入れがよかったため、それが当たり前かと思っていたところ、検査の見学を断られ、【患者との間に壁ができた】と感じていた。しかし、実習終了後、リフレクションを用いたロールプレイを行って、【恥ずかしいというB氏の気持ちがわからなくなっている】【手術前で、B氏は他のことがあまり考えられない状況だったのではないか】【自分が患者に壁を作ると、患者を理解するうえで障害になる】と気づいていた。

実習中リフレクションを実際に活用してみて、【会話を成立させる、患者さんの思いを引き出す手段】だと思う。しかし、【リフレクションは自分の日常生活ではやっていないので難しい】と気づき、「練習をしないと、意味がある技術として使えない」と、考えていた。

また、【コミュニケーションは難しい】と繰り返し述べていた。特に、【患者を主に、患者の立場から考えることは簡単なことではない】【自分がいて、自分の中でいろいろ葛藤があるので、患者の状況をみてその意味を考えるのは難しい】と気づいていた。

表1 Ⅱ期実習のコミュニケーションの学び

学びを得たことから	学びの内容（カテゴリー）
コミュニケーションできなかった	【患者との間に壁ができた】
ロールプレイ	【恥ずかしいというB氏の気持ちがわからなくなっている】 【手術前で、B氏は他のことがあまり考えられない状況だったのではないか】 【自分が患者に壁を作ると患者を理解するうえで障害になる】
患者とのコミュニケーション	【コミュニケーションは難しい】 【患者を主に、患者の立場から考えることは簡単なことではない】 【自分がいて、自分の中でいろいろ葛藤があるので、患者の状況をみてその意味を考えるのは難しい】
リフレクション	【会話が深まった】 【患者の思い・《奥》を聴くことができた】 【リフレクションは自分の日常生活ではやっていないので難しい】 【会話を成立させる、患者さんの思いを引き出す手段】

* 網掛け部分は、アンケートの記載内容から抽出した

2. 各論実習のコミュニケーションの

インタビュー (表2)

各論実習で受け持ったC氏が「なぜ学生が受け持っているかという気持ちを表に出さず、実習に協力してくれたため、周りをみる余裕があった」と患者に感謝し、振り返った。総じて、周手術期にある患者に関わるのはたいへんだったが、各論実習は楽しくでき、「病室に行き、患者としゃべるのは楽しい」と思えるようになった。Ⅱ期実習では、疾患や患者の身体の状態から、『引いていた部分』があったが、各論実習で続けて同じ病棟だったため、似たような状態の患者をみても受けとめられた、と自分の変化も感じていた。

また、各論実習で最も印象に残ったコミュニケーションの学びとして、実習グループのカンファレンスでのことをあげた。学生Sさんが受け持ち患者とうまくコミュニケーションをとれずに悩んでいたところ、手術に立ち会う際、「患者さんがSさんに『おまえは立ってるだけか?』と言ったことを聞いて、ハッとしたり」と述べている。「こんなにSさんががんばっていて、気持ちもすごい追い込まれていて、なんでそういうことを言うのだろう」と思った。その後、Sさんに患者がありがとうと言ったことを聞き、【患者の中で大きな葛藤があったと思うが、看護で一生懸命に働きかけると、その気持ちは相手に伝わるのではないかと気づいた。また、「コミュニケーションのとり方や、援助を丁寧に続けたことから、患者さんが(Sさんの気持ちを)感じたのではないかと述

べ、このことから患者との関わりの【全部がコミュニケーションに入るのではないかと】と友達から学んだことを、自分の言葉で述べていた。

また、患者さんとの関わりについて【距離を置くこと、隣にすることが必ず両方必要で、患者が必要なきにどちらでも提供できるようにしていかなければならない】と気づいた。そのため、【患者の状況を把握のため、コミュニケーションが必要】で、これがスムーズな回復、自立につながると考えていた。「距離を置くこと、隣にすることは、精神的な関わりが必要になるとき、医療者の立場で回復の目標を設定して関わっていくときにどちらでも提供していけるようにするのが大切である」と述べていた。また、人を理解するとき【いろいろな人がいるし状況でちがうので、それを判断するには、いろいろな面から見なければいけない】と、考えていた。

Ⅱ期実習と各論実習のコミュニケーションのちがいについては、各論実習では「なるべく普段のように(入院していない時のように)患者が会話をするにはどうしたらいいか」と考えていた。指導者がカンファレンスで、「待つという、その時間も大切」と言ったことから、【普段の生活に近づけるためには、待つ時間も大切】だと気づき、「何もせず患者の側にいて苦痛なきもあるかもしれないが、人間が生活する時間では、しーんとした時間も必要だ」と考えるようになったと、述べている。また、各論実習でリフレクションは使

表2 各論実習のコミュニケーションの学び

学びを得たことから	学びの内容 (カテゴリー)
カンファレンス	【患者の中で大きな葛藤があったと思うが、看護で一生懸命に働きかけると、その気持ちは相手に伝わるのではないかと】 【全部がコミュニケーションに入るのではないかと】
患者とのコミュニケーション	【距離を置くこと、隣にすることが必ず両方必要で、患者が必要なきにどちらでも提供できるようにしていかなければならない】 【患者の状況を把握のため、コミュニケーションが必要】 【いろいろな人がいるし状況でちがうので、それを判断するにはいろいろな面から見なければいけない】
リフレクション	【患者がその先に話したいことがあれば、話が続く】
その他	【普段の生活に近づけるためには、待つ時間も大切】 【看護をして人にかかわることは責任を伴う】 【患者にわかりやすく伝えるためには、まず自分がわかって把握することが必要】 【自分が少しでも手を抜くことは絶対できない】

ってみたが、【患者がその先に話したいことがあれば、話が続く】ことに気づいていた。

その他に感じたことでは、【看護をして人に関わることは責任を伴う】し、【患者にわかりやすく伝えるためには、まず自分がわかって把握することが必要】と気づいた。また、患者への態度を自分自身や実習メンバーから振り返り、「相手が病気を治すために病気に立ち向かっている戦場のような場所」で、【自分が少しでも手を抜くことは絶対できない】と、看護する態度も学んでいた。

IV. 考察

基礎看護学ではコミュニケーション教育で、学生が〈自分をわかる〉、〈相手をわかる〉過程を重視し、マイクロカウンセリング技法にある《他者の話を聴ける》ことを目標としている。(図1)つまり、基本的かかわりで、特に意味の反映=リフレクションなどの技法を使いながら相手の話についていく、ことである。

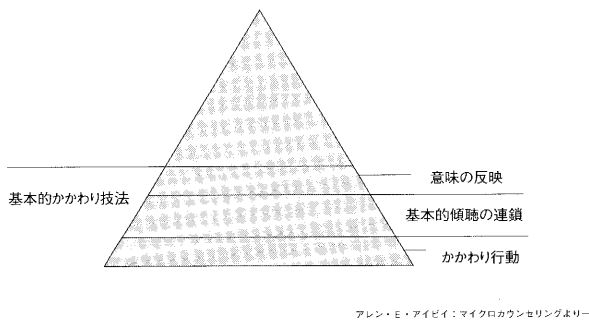


図1 基礎看護教育がめざすマイクロ技法

今回の対象のAさんは、Ⅱ期実習中、患者との関わりで課題を見いだすことができ、基礎看護学におけるコミュニケーション教育の目標に近づいていた。Ⅱ期実習のインタビューから、自分と他者を区別でき、自分の中で他者との葛藤も受けとめられていて、他者のことを考える準備状態が整っていることがわかった。また、患者の思いを知ることは難しいが、知りたいという気持ちでコミュニケーションをとっていることや、リフレクションする意義も理解していた。

一方、各論実習では実習メンバーからも学ぶことができている、特に、各論実習のカンファレンスを通しての学びが大きかった。この実習では周囲をみて考える余裕もあり、人間的にも、看護者としても成長していることがうかがえた。Aさん

の実習メンバーへの視線もあたたかく、Sさんの患者に対する思いに共感している。学生たちは、受け持ち患者に対して精一杯、日々関わろうと努力している。そのなかで、対象の理解は、多面的にみる必要を実感している。また、【患者の中で大きな葛藤があったと思うが、看護で一生懸命に働きかけると、その気持ちは相手に伝わるのではないか】と関わりを肯定的に捉えている。Aさんが患者を理解したいと思い、話をよく聴く態度で接していること、また学生である立場は患者と異なるものの相手を理解しようとする態度で臨めば、逆に相手にも理解してもらえするという前向きな姿勢でいることがうかがえる。援助関係における最初の仕事は、聴くことであり、2番目の仕事は、個別的な多重文化的感性をもって聴くことである、という基本的関わり技法が学んでいると考える。意識的に発達させて看護のあらゆる部門で用いることができる重要な能力として「関わること」と「気づくこと」があげられている⁴⁾。「関わること」は、本当の意味での『聴く』ことが重要であり、「気づくこと」では、判断を下さず物事をありのままみることが大切としている。Aさんは、この基本に臨地実習で気づくことができていると思われた。

また、各論実習で患者との関わり【全部がコミュニケーションに入るのではないかと気づいている。さらに、その理解に留まらず、看護者として患者にコミュニケーションをとりながら患者を把握し、普段の生活も考慮に入れたよい人間関係の距離を提供する必要性にも気づいている。

コミュニケーション技法であるリフレクションを実践しての感想も、Ⅱ期実習、各論実習で変化がみられている。Ⅱ期実習では、【会話を成立させる、患者さんの思いを引き出す手段】、《奥》を聴くことができた、とりフレクションの意義を理解をしている。各論実習では、さらにリフレクションを使うことで【患者がその先に話したいことがあれば、話が続く】ことに気づき、患者を主にした意義の理解に発展していると思われる。

臨地実習は、コミュニケーション以外の他の科目や知識と関連付けた指導も必要である。しかし、今回、Aさんのインタビューから臨地実習におけるコミュニケーションの学びが確認できたように、コミュニケーションの基本である〈自分をわかる〉ためには、そのときどきの自分の感じを明確にすることも大切である。自分たちのコミュニケーシ

ヨンの授業評価として、コミュニケーションに焦点をあてて学生の話の相手にそって聴き、振り返ることは、他者とのかわり方を考えるよい機会になると考える。

また、2回のインタビューを通して、学生は授業直後だけでなく、その後も学内あるいは臨地実習で学んだことをもとに、学びを発展させていく力があることがわかった。コミュニケーションは様々な要因によって変化するが、学生が常に基本を振り返り、自分、相手をわかるよう努力していきけるように援助していきたい。

V. 結論

コミュニケーション教育およびⅡ期実習と各論実習の指導に関わり、よくコミュニケーションが学べていると思われた看護学科2年生に半構成的インタビューを行った。その結果、以下のことが得られた。

- 1) 実習中、患者との関わりで課題を見出すことができ、コミュニケーション教育の目標に近づいていた。
- 2) コミュニケーション技法を使うことは自分、患者にとって意義があると気づいていた。
- 3) 自分と患者の関わり以外でも、コミュニケーションの意義を学ぶことができていた。また、学んだことを、看護に反映させようと努力していた。

おわりに

本研究に協力してくれたAさんに感謝します。

また、先行研究の指導、助言をくださった本学基礎看護学教授原田慶子先生、本学の木下彩子先生に記して深謝します。

引用文献

- 1) 見藤隆子, 飯田澄子: ケアの質を高める看護カウンセリング, 医歯薬出版, 1997
- 2) 酒井志保, 原田慶子, 木下彩子: 看護の質を高めるコミュニケーション教育の検討—講義、学内演習、臨床実習での教育内容の統合を目指して, 日本赤十字秋田短期大学紀要, No.6, p.31-36, 2001
- 3) 同上, p.31-36, 2001
- 4) フィリップバーナード: ナースが自分を知る本, p.80, 医学書院, 1994

参考文献

- アレン・E・アイビィ: マイクロカウンセリング, 川島書店, 1985, 福原真知子, 梶山喜代子, 國分久子, 楡木満生訳編, *Introduction to microcounseling*
- 木村美智子: 戦後の基礎看護学におけるコミュニケーション教育の変遷, 日本赤十字愛知短期大学紀要第, 10号, p.15-24, 1999